

総合芸術的な表現活動のもたらすもの

—上越教育大学附属中学校 10 年の取り組みから— ときえ 時得紀子

目的

平成 9 年度に産声を上げた、上越教育大学附属中学校のミュージカルの創作活動は、今年度で 10 年という節目を迎える。こうした実績などが評価された同校は平成 16 年度に文科省研究開発学校の指定を受け、今年度は 3 年間の最終年度となった。

音楽科を核としてほぼすべての教科がかかわることから発足した、同校の生徒によるミュージカルの創作活動の継続研究の成果と今後の課題について、主として音楽科の視点から分析していく。さらに中学校における総合表現活動の意義について検証する。

結果

教科横断的な学習はテーマを基に各教科が関連していくスタイルが多いが、この表現創造科の実践のように表現活動を横断させてアプローチすることにより、新しくかつ幅広い表現、生徒の主体的な表現を導き出す成果や、創造力の育成が認められる。

同校の実践では、表現の基盤が音楽表現であり、音楽科という教科の総合性、拡張性が示唆される。

この特質やコミュニケーション力の育成を研究指定校等以外の一般校における音楽科の教科学習においても積極的に取り入れていくことが望ましい。

方法

近年の同校のミュージカルの創作はかつてのほぼ全教科がかかわる活動から、音楽科と美術科と総合学習を合科させた「表現創造科」を核として、今日的なテーマについてさまざまな教科がかかわる活動へと変容してきた。

過去 10 年間のカリキュラムの変遷は、紙幅の都合上割愛するが、平成 16 年度研究開発学校指定以降の実践事例を分析対象の例として以下に示す。

「総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した新たな教育課程の研究開発」を課題に掲げ、既成教科の枠組みを大幅に改編し、「情報活用科」、道徳と学級活動を一体化させた「人生ゼミ」、総合的な学習の時間と音楽科、美術科を一体とし総合的な表現活動を培う「創造表現科」等、新たな 10 教科を編み出した。「創造表現科」において 3 年生は、中学 3 年間の学びの集大成としてのミュージカル制作が中心と

なり、年間で音楽科 35 時間、美術科 35 時間、総合的な学習 50 時間の計 120 時間を費やす。

田中博之が示す、「総合表現活動のためのスキル育成について」にも示される、主として必要とされる以下のようなさまざまなスキルの観点が実際の創作活動では求められているといえよう。

- ・多様な作品を鑑賞して、特徴ある表現技法を取り出すことができる。
- ・表現テーマに関して必要な資料を収集することができる。
- ・調査、台本づくり、リハーサル、上演に関わる分担を明確にして自分の役割を果たすことができる。
- ・照明・音声・ビデオカメラ・コンピュータ等の機器を操作することができる。
- ・自分や友達の演技について評価して改善案を出すことができる。
- ・イメージを明確に持って表現（身体、言語、表情、歌、演奏）することができる。

内容

（現在では附属中の伝統として中心的行事に位置付けられるが、過去 2 年間の同校の実践概要を具体的に示し、その成果を踏まえた考察を加える。）

1 「手づくりショータイム-舞台芸術に挑戦-」

（2006 年 2, 3 月 2 年生）

(1) 実践の概要

①ガイダンス②少人数グループに分かれ身の周りにある素材（デッキブラシ、バケツ、ゴミ箱等）の音色を使い、リズムパフォーマンスを作る。③スポットライトの使用法を学習し、グループ同士にペアになりお互いのグループのリズムパフォーマンスの照明を行なう。④完成したパフォーマンスの発表

(2) 実践の考察

3 年生のミュージカル実演に向けて取り組まれる単元であり、スポットライトの使用法等の技術を学びながら、ミニチュア「舞台表現」を創作する学習。表現の基となるものは、身の周りにある素材の音色を重ね合わせながら創作するリズムパフォーマンス。さらにスポットライトという色の表現の学習と横断させることにより、音楽表現と色彩表現のコーディネートによって新たな表現を生み出すだけでなく、「観客を意識した表現」という舞台表現の基礎となる表現方法に気付き、視覚的なパフォーマンスを創造していく。



製作過程の授業においては、グループ学習の中で、相手に合わせてリズムを作り出す、素材の音色を試行錯誤する等の姿が見られた。スポットライトでパフォーマンスに合わせる活動も含めて、生徒同士によるノンバーバルコミュニケーションを育てる活動に導かれていた。また、「身の周りの素材」「リズム」「照明」という複数の表現を横断させることにより生徒が主体的に新しい表現を作り出していたことから、「創造力」をも培っていたものと考えられる。

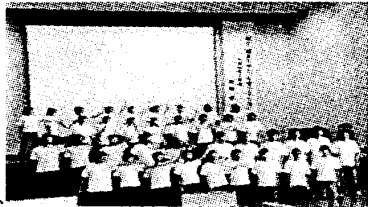
2 「声とからだでハーモニーー Let's Enjoy! Chorus & Dance ー」(2005年10月 3年生)

(1) 実践の概要

①ガイダンス②「さとうきび畑(寺島尚彦作詩・作曲)」の混声四部合唱を詩からの情景や心情、作曲者の思い等、意見交換をしながら作り上げた。③この合唱曲に合った身体表現を創作し、舞踊家やチアリーダーなどの外部講師からの指導も受けながら練り上げ、Chorus & Dance を創作。④発表会を開く。

(2) 実践の考察

単に歌にリズムダンスをつける活動ではなく、「曲想」に合わせて身体表現を創作したことは、生徒の曲への思いや、表現したいことをより身体を通じて前面に出す方向へと導かれたようだ。

また、集団での身体表現は互いを意識しながら創りあげることが必要とし、生徒達も「統一感」を課題に外部講師の指導を受けていた。この「統一感」は、身体表現のみならず音楽表現においても求められ、Chorus & Dance が一体化した新しい表現活動となっていることが示唆された。

3ヵ月後に行なわれた本番のミュージカルでは、この学習経験が生徒自身によって活用されていた。

このように、同校の実践の学びの過程では、生徒同士のコミュニケーションが大切にされている。音楽科はコミュニケーション力という今日的な学力を育てることが可能な教科であることを認識し、実践や評価の手がかりとしていくことが望まれよう。

3 「体験！総合芸術-ミュージカル-」(2005年4～12月)における音楽表現について

(1) 実践の概要

表現創造科での学びの集大成としての「ミュージカル作り」は各学級で4月から74時間をかけて製作された。「どのようなテーマにするか」という討論会から、シナリオの検討、音楽・美術・ダンスに分かれてのパート別練習。パート別練習での創作を持ち寄ってシナリオと照らし合わせて完成させていく。ミュージカルの発表会は地域や保護者公開で12月に実施された。



(2) 実践の考察(各クラス毎の舞台発表から)

3年2組は、障害者問題を取り上げ、耳の聞こえない少年との触れ合いを描いたミュージカル「心のおくりもの～From me to you～」を製作した。このミュージカルでは、全編を通して手話が入り、学級一丸となって手話の習得に努めた。挿入歌を歌う主人公は最終練習の時に、「歌に何か足りない」と感じ、本番のステージでは歌唱にも手話をつけて披露。聴衆の感動を誘った。この生徒が本番では手話を入れることにより、音楽表現も幅を格段に広げたことについては、次のように考察する。

- ・ミュージカルという総合芸術の中での舞台背景、スポットライト、シナリオ等の「環境」に後押しされて思いを高めていった。
- ・74時間の壮大な取り組みの中での、仲間や作品等への思いの高まりが加わった。
- ・表現創造科の舞台表現の学習、表現のコーディネートにおける学びの活用が成果が現れた。

参考文献・資料

- ・上越教育大学附属中学校著(1998)『こうしてつくった総合学習』教育開発研究所
- ・時得紀子(1997)「総合的学習と表現教育」村川雅弘編『総合的学習のすすめ』日本文教出版
- ・田中博之編(時得紀子 他共著)(2002)『総合表現型カリキュラムを創る』明治図書
- ・時得紀子(2004)「総合的な学習の時間と音楽科」『改訂新版 中等科音楽教育法』音楽之友社
- ・小町谷聖(2006)ラウンドテーブルⅣ「総合的な学習における表現活動は、教科学習の音楽表現をどのように変えるのか」日本学校音楽教育実践学会第11回全国大会
- ・上越教育大学附属中学校著(2006)『新たな単元開発への挑戦！-総合と教科が一体化した単元の魅力-』